

令和元年6月19日現在

機関番号：20105

研究種目：基盤研究(A)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16H01803

研究課題名（和文）「拡張キャンパス型地域連携」による過疎市町村の自律的創生デザイン研究

研究課題名（英文）A Research on Local-Driven Design Methodology by Implementing Augmented Campus Program

研究代表者

蓮見 孝 (HASUMI, takashi)

札幌市立大学・デザイン学部・特任教授

研究者番号：60237956

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 27,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、周辺過疎市町村の自律的な活性化と、大学における教育効果を高めることを目的とした研究活動を行った。

「授業型学び」「Project Based Learning型学び」「Workshop型学び」「Field Work型学び」の4つの学びを設計・実践し、各参加者の意識変化を定量的に捉えた。また、台湾と日本の学生による国際ワークショップを開催し、各種分析評価手法の検討・実施を行った。以上の研究活動を通して得られた成果の社会還元を目的とした教育プログラム化/学問体系化を、書籍【地域創生デザイン論 - “まち育て”に大学力をどう活かすか】の出版につなげるべく準備中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、教育プログラムの設計運用、ワークショップの開催など様々な手法を実践的に試みた。地域主体の自律的創生力を刺激するために、次世代を担う学生たちの自律的創生支援デザイン教育に焦点を当て、大学の立地する都市と周辺市町村が連携した教育プログラムパッケージを観光を絡めた継続的なビジネスモデルとして地域活性化のトリガーにしようとする点に独自性がある。

大都市の有するインフラとしての大学と周辺市町村が連携することで、大学においては教育効果が高まる、周辺市町村においては地域活性化のための継続的なビジネスモデルとして活用可能になるという2つの成果があり、学術的・社会的意義を含むものといえる。

研究成果の概要（英文）： The aim of the research is twofold: (1) to present a new design discipline on design doing focused not only on students but also on locals, (2) the verification and implementation of ACP (Augmented Campus Program) on local-driven design.

The ACP is an enhanced educational program, which includes lectures, project-based learning, workshops, and fieldwork. The research verified the effects of these four types of educational program on design thinking and understanding. Not only Japanese but also Taiwanese participated in the research through an international workshop. This research will be published in a book titled "Local-Driven Design Methodology: A New Approach to Design Doing by Implementing Local Power".

研究分野：地域創生デザイン

キーワード：地域創生 過疎市町村 拡張キャンパス デザイン

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

現在わが国では、少子高齢化に伴う地域の衰退への対策が大きな課題として顕在化してきている。特に北海道は「未来日本の縮図」と形容され、対策案立案が急務となっている。地域の再生は、産業だけでなく、地域の魅力・特性、地域を支える自治体、自治体を支える住民の意識など、多方面からの検討が必要と考えられる。複雑多岐にわたる衰退要因を統合し新たな調和と持続的発展を方向付けるコーディネーションを担うデザインの役割と機能は、これからの地域創生活動にとって極めて重要である。

2. 研究の目的

詳細を後述する「授業型学び」「PBL型学び」「WS型学び」「FW型学び」といった段階を経る教育プログラムの構築と、学生/地域住民を対象とした教育実践、その評価を通しての教育プログラムの構築を第一の目的とする。また、地域特性を明瞭にするための定量化手法の確立と、地域特性評価モデルの構築を第二の目的とし、地域創生デザイン学の体系化を目指す。

3. 研究の方法

「キャンパスの拡張」を基本コンセプトとした教育プログラムの実践と評価を行うものであり、学生と地域住民を対象とした実践的な試みとする。なお、地域創生デザイン学の体系化を目指す上でのプログラム化に関しては、学生をはじめ地域住民に還元できる研究成果とする為に、「出版」を想定とした研究活動とする。

4. 研究成果

(1) 教育プログラムの設計、実践、評価

「授業型学び」「PBL (Project Based Learning) 型学び」「WS (Workshop) 型学び」「FW (Field Work) 型学び」の4つの学びを実践、評価した。

(1-a) 「授業型学び」(図1)

講師1名がスライド等を用いて口頭で講義を行い受講生複数名が個々に聴講した【授業型学び】を全3回実施した。参加者は全3回の総数で、札幌市立大学学生が24名、壮瞥町商工会青年部員が30名であった。

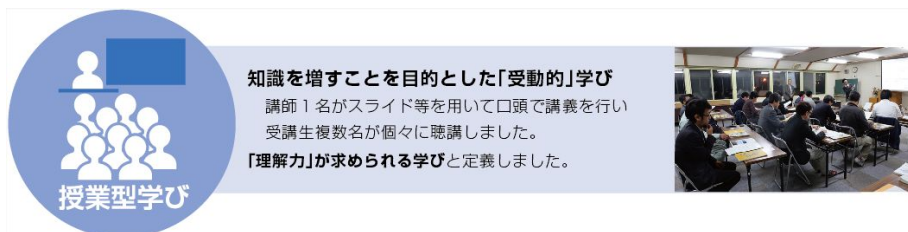


図1. 授業型学び

(1-b) 「PBL (Project Based Learning) 型学び」(図2)

講師2名が運営役となり、受講生が4名程度×3グループとなり提案を行った【PBL型学び】を3日間の集中講義的に実施した。参加者は、札幌市立大学学生10名、壮瞥町商工会青年部5名であった。

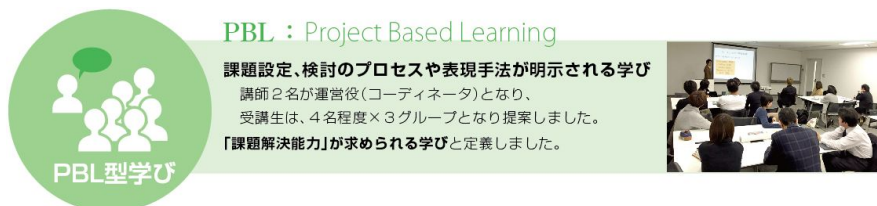


図2. PBL型学び

(1-c) 「WS (Workshop) 型学び」(図3)

講師1名と補助教員が運営役となり、受講生が5名程度×2グループとなり提案を行った【WS型学び】を3日間の合宿形式で実施した。参加者は、札幌市立大学学生10名、壮瞥町商工会青年部8名であった。

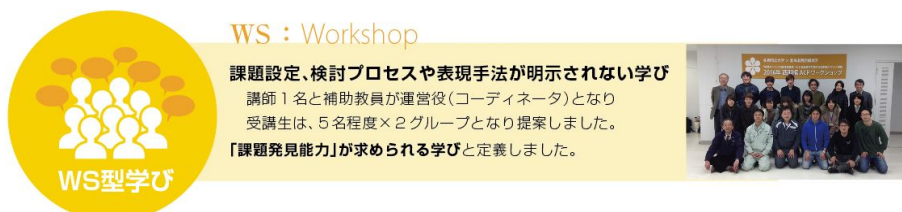


図3. WS型学び

(1-d) 「FW (Field Work) 型学び」(図 4)

教員 3 名と補助職員が引率役となり、受講生が 5 名程度× 3 グループとなり調査を行った【FW 型学び】を 3 日間の宿泊を伴うフィールド調査形式で実施した。参加者は、札幌市立大学学生 8 名、壮瞥町商工会青年部 3 名であった。

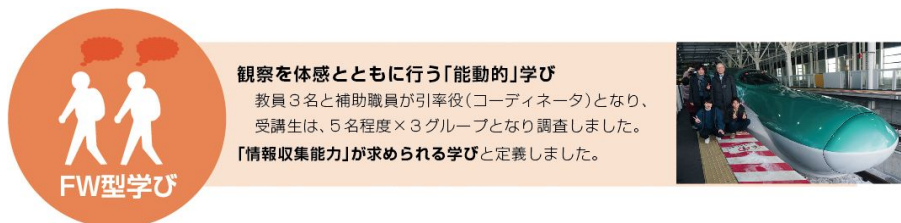


図 4 .FW 型学び

(1-e) 学びの評価 (図 5)

以上の「教育効果の質」を明らかにすることをめざし、各参加者の意識変化を定量的に捉えることを目的としたアンケート(【デザイン】に対する考え方がどのように変化するか)の設計を行い、実施した。

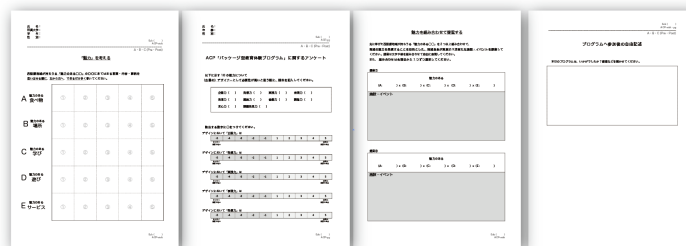


図 5 .設計したアンケート用紙

結果、ACP パッケージ型教育体験プログラムの参加が進むにつれ、学生および青年部ともに「表現力」に関する評価が低下していく傾向に加え、壮瞥町商工会青年部が捉える“デザイン”が【表現などに関連する仕事】から【問題解決要件に関連する仕事】という認識に変化していった可能性が図 6 のように示された。以上から、各教育の型がデザイン学のどのような要素の向上に寄与するものなのかを明らかにすることができるとした。

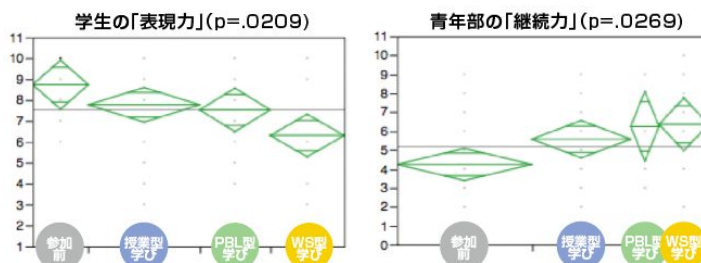


図 6 .参加が進むに連れての評価の変化傾向

(1-f) 地域特性を明瞭にする為の手法開発

なお、地域の魅力調査手法として GPS ロガーを開発し【FW 型学び】で試用を行ったが、いくつかの課題が明らかになり次年度以降の改善の必要性を明らかにした。

(2) 体験型観光プログラムの検討

来道外国人旅行者の中心である台湾の学生と日本の学生による国際ワークショップ(図 7)を洞爺湖地区で開催し、新たな体験型観光プログラムの検討を行った。具体的には【サイトシーティング型】【ツーリズム型】【アートプロジェクト型】と定義した観光客向け「ツーリズム」提案をテーマとした総参加学生数 54 名(札幌 18 名、東京 10 名、台湾 26 名)の「WS(Workshop)型学び」を実施し「教育プログラム」および「観光の型」の比較を行った。

結果、「教育」という大学が有する固有の機能を活用することにより、たとえ既存の観光プログラムであっても魅力的な滞在型の観光プログラムへ発展しうる、観光プログラムの内容につ



図 7.国際ワークショップの参加者

いては、サイトシーング型は、チャレンジ性の高い観光を期待する観光客には適切ではない、ツーリズム型は新しい発見を期待する観光客には適切でない、等との知見を得た。

また、各型の参加意識の変化抽出を目的とした調査手法の検討/実施、エゴグラムによる教育プログラム毎の学生への影響分析手法の検討/実施、スマホアンケートによる参加学生の心理状態の変動把握手法の検討/実施、カメラ付き GPS ロガーによる対象物/場所/心理を紐付けた観光地評価手法の検討/実施を図 8 のように行った。



図 8 . 定量データ取得の為の手法

以上の定量データからは、WS の開始から終了までの参加学生の心理変化の可視化、例えば台湾の学生が新しい発見や達成感の得られる「知的欲求」を満たせる観光タイプを求めめる傾向にあるなどといった参加動機の明確化、サイトシーング型はチャレンジ性の高い観光を期待する観光客には適切でなくツーリズム型は新しい発見を期待する観光客には適切でないなどといったプログラムそのものの特性の明確化、サイトシーング型は学生の積極性・自発性に影響を与えやすい可能性があるなどといった地域創生を担う人材の性格分析手法の構築などが成果として得られた。

なお、第二年度より追加した「フィールドワーク型学び」も継続して実施し、過疎市町村の継続的ビジネスモデルの先進事例調査を、地域住民を参加者として実施した。具体的には、1. 地域資源を活用した体験型プログラム、2. 過疎市町村における持続的ビジネスモデル、を視察し地域の自律を促す知見を得ることを目指した。

(3) 研究の成果社会還元

以上の研究活動を通して得られた本研究の成果の社会還元を目的とした、教育プログラム化/学問体系化を、書籍【地域創生デザイン論 - “まち育て”に大学力をどう活かすか】の出版(図9)を想定した「書籍のコンセプト設計」「執筆活動」にて実施した。具体的には、書籍の出版の目的を「地域創生を主体的・創造的に担う人材の育成」とし、多様な地域創生に関わる専門性を有する大学教員の試みを、一般的な方法論に落とし込む作業を行った。

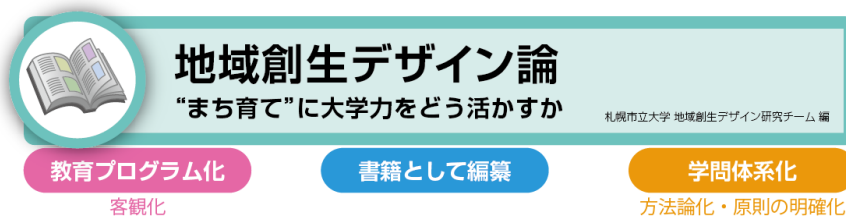


図 9 . 出版を想定した研究活動

(4) 研究の結論

以上のように本研究では、「WS 型学び」等で構成される教育プログラムを構築し、各学びの特性を明らかにした。また、地域特性を明瞭にするための定量化手法、地域特性評価する手法を開発した。

以上の成果は、過疎市町村の自律的創生を促すデザイン学の構築の一助を担うものと考えられ、地域創生デザイン学の体系化にあたっては、学生をはじめ地域住民に還元できる形式である「書籍」とすることとし、編纂が進んでいる。

5 . 主な発表論文等

[学会発表](計7件)

S.Kim, T.Yakubo, K.Kakiyama, M.Sakai, T.Hasumi, T.Hara, M.Katayama, Y.Shiroma, R.Yamada, M.Saito, H.Ueda, Rethinking Design-Doing Focused on Design-Learning, International Conference on Design Principles & Practices 2019、平成 31 年 3 月

柿山 浩一郎、地域創生デザインの為の GPS ロガーから見えてくる道具のありかた、電子情報通信学会技術研究報告 vol.118、no.147 IMQ2018-10 pp.25 - 28、平成 30 年 7 月

柿山 浩一郎、矢久保 空遙、金 秀敬、酒井 正幸、山田 良、斉藤 雅也、原 俊彦、蓮見 孝、地域創生デザインの為の GPS ロガーの試用と動作評価、日本デザイン学会誌 第 65 回研究発表大会概要集 p.144-p.145 2018(フラッシュメモリ出版)、平成 30 年 6 月

矢久保 空遙、金 秀敬、柿山 浩一郎、山田 良、酒井 正幸、斉藤 雅也、原 俊彦、蓮見 孝、エゴグラムにみるアートプロジェクト型ワークショップの効果、日本デザイン学会誌 第 65 回研究発表大会概要集 p.138-p.139 2018(フラッシュメモリ出版)、平成 30 年 6 月

金 秀敬、矢久保 空遙、柿山 浩一郎、酒井 正幸、山田 良、斉藤 雅也、原 俊彦、蓮見 孝、拡張キャンパス型地域創生デザインの試行「ツーリズム」、日本デザイン学会誌 第 65 回研究発表大会概要集 p.538-p.539 2018(フラッシュメモリ出版)、平成 30 年 6 月

柿山 浩一郎、矢久保 空遙、金 秀敬、酒井 正幸、片山 めぐみ、上田 裕文、斎藤 雅也、山田 良、原 俊彦、細谷 多聞、城間 祥之、蓮見 孝、地域創生デザインの為の GPS ロガー開発 -試作と試用を通じた設計-、日本感性工学会 第 19 回日本感性工学会 予稿集 F21 p.1-p.3(フラッシュメモリ出版)、平成 29 年 6 月

酒井 正幸、柿山 浩一郎、金 秀敬、矢久保 空遙、上田 裕文、片山 めぐみ、蓮見 孝、拡張キャンパス型地域創生デザインの概念、日本デザイン学会誌 第 64 回研究発表大会概要集 p.308-p.309 2017(フラッシュメモリ出版)、平成 28 年 7 月

〔その他〕

ホームページ等

札幌市立大学 「拡張キャンパス型地域連携」による過疎市町村の自律的創生デザイン研究
<http://kakiyama.info/research/kaken/2018/acp/>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：酒井 正幸

ローマ字氏名：SAKAI ,masayuki

所属研究機関名：札幌市立大学

部局名：デザイン学部

職名：特任教授

研究者番号(8桁)：00433128

研究分担者氏名：片山 めぐみ

ローマ字氏名：KATAYAMA ,megumi

所属研究機関名：札幌市立大学

部局名：デザイン学部

職名：講師

研究者番号(8桁)：40433130

研究分担者氏名：城間 祥之

ローマ字氏名：SHIROMA ,yoshiyuki

所属研究機関名：札幌市立大学

部局名：デザイン学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：90113571

研究分担者氏名：金 秀敬

ローマ字氏名：KIM ,sukyong

所属研究機関名：札幌市立大学

部局名：デザイン学部

職名：講師

研究者番号(8桁)：60780103

研究分担者氏名：原 俊彦

ローマ字氏名：HARA ,toshihiko

所属研究機関名：札幌市立大学

部局名：デザイン学部

職名：教授

研究者番号(8桁)：00208654

研究分担者氏名：矢久保 空遙

ローマ字氏名：YAKUBO ,takanobu

所属研究機関名：札幌市立大学

部局名：デザイン学部

職名：助教

研究者番号(8桁)：50780079

研究分担者氏名：山田 良

ローマ字氏名：YAMADA ,ryo

所属研究機関名：札幌市立大学

部局名：デザイン学部

職名：准教授

研究者番号(8桁)：00452988

研究分担者氏名：上田 裕文

ローマ字氏名：UEDA ,hirofumi

所属研究機関名：北海道大学

部局名：観光学高等研究センター

職名：准教授

研究者番号(8桁)：30552343

研究分担者氏名：齊藤 雅也
ローマ字氏名：SAITO,masaya
所属研究機関名：札幌市立大学
部局名：デザイン学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：20342446

研究分担者氏名：柿山 浩一郎
ローマ字氏名：KAKIYAMA,koichiro
所属研究機関名：札幌市立大学
部局名：デザイン学部
職名：准教授
研究者番号（8桁）：30410517

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。